

平成25年度 大学院工芸科学研究科 学位授与式（秋季）
学長告辞

本日、修士と博士の学位を取得されました皆さん、誠におめでとうございます。

京都工芸繊維大学を代表し、心からお祝い申し上げます。また、皆様をこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申し上げたいと思います。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に大学院を改組し、工芸科学研究科を設置しました。これまでに、7653名の修士号と671名の博士号の学位を授与してまいりました。

本日皆さんには、修士学位 7654号から7668号まで、課程博士甲第672号から甲第686号まで、論文博士乙第189号の学位を授与致しました。皆さんの研究業績は本学の知的財産に加えられ、提出して頂いた学位論文は広く人々に公開され、それぞれの分野における新たな展開のため、また技術革新や産業創出のために活用されます。さらに皆さんに続く後輩の研究のために利用されます。

学位を取得された皆さんには、今後、それぞれの分野においてその能力を発揮されることを希望しています。そして、特定の専門領域で研究テーマを深く極めることに主眼を置いた研究方法だけでなく、広い視野に立って、他の研究者との共同作業を心がけてください。そして自らの研究や仕事が、社会的にどのような役割を持つのか、社会にどのような影響を及ぼすのか、科学者として、技術者として、一人の人間として、社会的責務を果たすことを考えてください。

皆さんは、すでに20年以上の勉学と研鑽を積んでこられた結果、本日の博士号の学位取得に至ったわけであります。人生の活動期の半分近くを費やして、学位を取得されたことになりませう。博士の学位取得は人生の一大イベントであり、自らの人生の方向を定める一大事業でありませう。博士号を取得した以上、今日の時点では世界のだれよりもその分野に通暁しているのは、あなた自身でありませう。その意味では、あなたは自分の専門分野において、世界の最高峰に立ったといっても過言ではないでしょう。したがって、自分の研究をもっともよく評価できるのも、もっとも厳しく評価できるのもあなた方においてほかにはないのです。しかしながら、日本

の社会や企業において、博士号取得者の社会的評価は決して高くないのも事実です。狭い専門分野に閉じこもり、幅広い分野の研究へと展開する力がないといわれています。

今日の学位記授与式にあたり、京都工芸繊維大学が掲げる理念を踏まえ、科学と芸術、知と美と技に通低する「モノづくり」について改めて考え、モノづくりというものが、学術文化にどのように貢献してきたのかを皆さんに伝え、私からの贈る言葉に代えたいとおもいます。

学問の府である大学においては、理論的考察が第一義であり、具体の技術は一段低くみられる傾向があります。モノづくりは、個別的であり、具体的であり、現場主義であり、肉体作業を伴うものであります。それゆえに経験的であり、理論化することが困難な分野であり、普遍化することが苦手な世界であります。こうした状況から、モノづくりは理論研究より一段低くみられる傾向が出てきます。

京都工芸繊維大学が国立の教育研究機関としての役割を考えると、実践的モノづくりが、いかに社会の役に立つかを喧伝するだけでなく、世界あるいは人間を理解するうえにおいても、モノづくりは哲学と同等の役割を果たし、学術文化の形成に寄与してきたことを常に確認し続けることが必要です。我々が、実務の世界でもアカデミアの世界でも、自覚と自信をもって活躍するためにも、モノづくりという活動領域は、理論的あるいは歴史的な根拠があることを常に確認することが必要なのです。

例えば、「隠喩としての建築」という著作の中で、柄谷行人は次のように述べています。

「古代ギリシャにおいて、哲学者を定義するにあたって、建築家を哲学者の隠喩として用いたことはよく知られている。ギリシャ語において、建築はアーキテクトンというが、この語は、始原や始まり、原理を意味するアルケーと職人を意味するテクトンの合成語である。つまり、ギリシャ人にとって、建築は単なる職人の技術ではなく、原理的な知識をもち、個別の技術や職人を統括し、製作を企画立案、指導する技術と理解されていた。語源の詮索はともかく、重要なことは、プラトンやアリストテレスが哲学者を建築家になぞらえ、哲学を知の建築、知的構築物と見なした点である。プラトンはその著「饗宴」の中で、あらゆる技術に属する製作は、創作であり、それに従事する工作者は創作者なのである、と言っている。」

ものづくりの本質は、世界を構築するという作業であります。西洋文明の起源であるギリシャにおいて、偉大な職人は、哲学者と肩を並べ、世界を言葉で構築するか、世界をモノで構築するか、の違いはあるものの、両者の役割の違いはなかったのであります。

しかし20世紀近代における知的活動においては、言葉や記号による普遍性を目指した理論的な営みこそが優勢を占め、大学における教育も、理論を重視し、現場のモノづくりを軽視するに至りました。物理学、数学、論理学、さらには抽象絵画や12音階音楽などに共通する特徴は、フォーマリズム、形式化と呼ばれる特徴です。その極端な事例は、数学においてヒルベルトが目指した無矛盾な体系の構築であります。しかし、残念ながらヒルベルトの構想は、ゲーデルの不完全性定理によって打ち碎かれます。このゲーデルの「不完全性定理」、あるいはハイゼンベルクの「不確定性原理」などによって、20世紀近代が目指していた夢、普遍的な体系、透明な論理的構築物を建築する構想には、理論的な限界があることが示されたと言えるでしょう。

21世紀の今日においては、大学の教育研究活動の重心は、抽象的で自律的な知の体系を構築するという理論的な関心から離れて、より実践的で、現実的、経験的な個別の現実の課題の解決に回帰しつつあります。かつては、学者＝知識人と言われた時代から、いまや学者＝技術者という時代になっています。現代における知の体系は、数学や理論物理学による理論的基礎付けから離れて、工学的技術を自由に駆使した実践的な成果が求められているのです。特殊性、個別性を突き詰めていくことによって、結果的に巨大な構築物を作り上げる機会が訪れるかもしれない。この意味で、再びモノづくりというものが非常に大切な意味を持つてくる時代がやってきたと言えるでしょう。

モノづくりに関して、避けて通れないのが現場における実践活動です。私の友人に安藤忠雄という建築家があります。彼は、建築現場を大切にする建築家であり、モノづくりの現場から実践的に人生を学んできた人です。彼の言葉は、現場からの教えというものをよく伝えていきます。たとえば、○「モノづくりの現場では悪戦苦闘することこそが必要であり大切である。」と彼は言います。これはどういう意味でしょうか？

「CADの導入をきっかけに、モノづくりの現場から身体性が失われてしまった。しかしいかに時代が変わろうとも、人間の意志で場所を選び、重力に逆らって部分から全体を組み上げていくという建築行為の泥臭さは変わりようがない。この泥臭いプロセスにおいては、悪戦

苦闘すればするほど、建築に生命が宿ることを我々は体験的に知っている。」

モノづくりにつきまとう泥臭さや身体性を避けて通るべきではない。そこに経済合理性を超える感動や職人への敬意が生まれるからだ。という指摘です。

言葉を変えて云えば、

- 「建築は矛盾から生まれる」ということも言えるでしょう。

建築は抽象的な概念からスタートする。設計者は常日頃から、基本的なアイデアをストックし、準備をしている。しかし、いざ現実の敷地にあてはめ、組み上げていくときには、現実の条件は、建築家の夢を押しつぶすほどに重くて複雑だ。

観念と現実、抽象と具体、この矛盾を正面から受け止め、あきらめずに努力を続けた時、建築が見えてくる。建築は予定調和ではない。矛盾の中から生まれるものだ。

安藤は更に激しく、現場で感じた矛盾や怒りに関して、次のように述べています。

- 「暴力性」

現代の人間は暴力を失ってしまった。暴力と言っても、社会や相手に対する感情的な怒りといった短絡的な行為ではない。自分に与えられた分限を超えて、自らの考えを提言していく行為、境界線を越えていこうとする力だ。

このように安藤は、モノづくりの現場における、身体性や個人の経験、激しいぶつかり合いといった人間ドラマに注意を向けています。実際に、モノづくりの現場では、精神力だけでなく体力を含む総合的な人間力が要求されます。今や、モノづくりの現場における労働の質は変化し、魂の労働と呼ばれるような全人的な労働が要求される時代です。管理と労働が融合し、労働と遊び、労働と休息の区分がなくなりつつある時代です。同時に、自由競争を阻害する不適切な労働力は排除されていきます。その意味で、絆が強調され、ボランティア、コミュニティといった競争原理ではない人間関係の在り方が求められているのかもしれない。

言い換えれば、近代社会の基礎となったフランス革命の3つの旗印「自由、平等、友愛」のうち、とりわけ友愛が強調される時代といえるでしょう。自由な活動は、経済的不平等をもたらす。経済的不平等を是正するためには、自由競争に制限を加えることになる。自由と平等は互いに調停す

ることが難しい時代なのです。平等が自由の歯止めにならない時代にあつては、友愛への期待は大きく膨らんでいきます。

自由と平等の矛盾を超えるものとしての友愛への期待は、大学の同窓生諸君への期待と共通したものがあります。なぜなら、大学は、卒業生は、友愛という絆で結ばれているからです。同じ学寮の出身者は文字通り同僚であり、苦学を共にした共通体験で結ばれた学友は典型的な友愛の仲間です。我々は、同じ大学に学んだ同窓生ではありますが、経済的な利益で結ばれているわけではありません。我々は共通体験と共通の思い出をもつ人間の集まりであり、いわば思い出の共同体の構成員なのです。

母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。卒業生の皆さんは、私たち教育者の誇りであり、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、卒業していただきたいと思います。

そしていつの日か、世界のどこかの街角で、どこかの会議室で、どこかの工場で、再びお会いできる日を楽しみにしています。

平成25年9月25日
京都工芸繊維大学長
古山正雄